

杉本苑子

永代橋崩落

中公文庫

中公文庫 ©1992

永代橋崩落

一九九二年四月二五日印刷
一九九二年五月一〇日發行

著者 杉本苑子

發行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トレープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

發行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八一七

振替東京二―三三四

ISBN4-12-201900-1

Printed in Japan

杉本苑子

永代橋崩落



中公文庫

文化四年八月十九日、江戸深川・富岡八幡宮
の大祭に押し寄せた人々をのせて、永代橋が
落ちた。一瞬にして二千人を越える老若男女
の命を奪った悪夢のような惨事を通して、事
件に巻き込まれた江戸庶民のさまざまな悲喜
劇、葛藤や哀歎の種々相を、鋭い人間洞察に
裏うちされた絶妙の筆致で描く連作八篇。



1911193004807

ISBN4-12-201900-1

C1193 P480E

定価480円(本体466円)

目次

風ぐるま

7

姉と妹

35

二人の母

69

蜂

109

椿の墓所

151

岸和田屋の娘

193

家訓

237

砂村心中

263

解説

縄田一男

295

永代橋崩落

風ぐるま

1

文化四年、卯どし八月、深川富岡八幡の祭礼が挙行されることになった。

長年月、途絶えていたのを今年、三十数年ぶりに復活するのだという。前景気はすさまじく、氏子連中はもとより江戸中が期待に沸き立った。

深川の町民は、山車の趣向に工夫をこらした。一番目にくり出すのが大工町・神功皇后の山車、二番が蛤^{はまぐり}町・金竜銀竜の山車、三番は佐賀町・佐々木高綱宇治川先陣の山車、四番目には相川町・戸隠山鬼女退治の山車というように蜿蜒^{えんえん}、三十台を越す壮観の合間合間に囃子方^{はやしかた}を乗せた踊り屋台の引き物、木場の大神楽、神輿^{みこし}や手古舞いの行列が割りこむから、その賑やかさは、

「おそろく、空前絶後……」

と評判され、他町の住民までが首を長くして八月十五日、渡御^{とぎよ}の当日を待ちわびた。ところがあいにく、この日は雨のため順延——。翌日も翌々日も、その次の日までし

つっこく秋霖しゅうりんが降りつづき、いい加減だれもが待ちくたびれた十八日夕刻、やっとあすの好天を約束する茜雲あかねぐもが、西空をいろどった。

「やれやれ、ようやく晴れるぞ。あしたこそお祭りだ」

撓ために撓ためていたバネが、弾ね返るにひとしい。いっせいに浮き立って、深川に知人親戚のある者ははやくも前夜から、泊りがけで出かける。十九日いち日だけで人出は数万、

「いや十数万……」

とも予測された。

南北両町奉行所は、月番、明番あけばんの区別なく全員、祭礼中は出動して、混雑の規制、事故の防止に当ることになった。

南の与力・渡辺小右衛門が、奉行の根岸肥前守鎮衛しずへいに呼ばれ、

「永代橋警固の総指揮をとってくれ」

と、特に命ぜられたのは、まだ二十七の少壮ながら、きわだって警吏としての成績がよく仕事にも熱心な、日ごろの勤務ぶりを買われたためである。

「知っての通り深川へは、陸路からなら大川を渡らなければ行けない。両国橋、新大橋、永代橋……。中でも富岡八幡宮へは永代橋がもっとも近く、人馬の往来は、どこよりもここそが多いはずだ」

深川への、咽喉部――。

「水ぎわ立った取りさばきの腕を見込んで、おぬしを永代橋に配置するのも、いわば交通の、ここが要かなめと思うからだし、いま一つ大切なことがある」

こころもち、根岸肥前守は声を低めた。

「ほかでもない。十九日正ただ辰ノ刻ひとつばし、一橋さまのご一行がお船にて永代橋下を通られ、深川十万坪の下屋敷しもに成らせられる」

「祭りのご見物でござりますか？」

「むろん公式のものではない。ごくお微行しのびでだが、女性にょしやうがた若きみ姫さまなど、打ち揃そろって山車のお練りをごらんあそばすおつもりらしい。臨機の判断は、橋上警備の責任者たるおぬしに委せる。如才もあるまいけれども、この儀を何よりも優先させ、万々、疎漏のないよう心して、奉迎奉送の任に当ってもらいたい」

「承知いたしました」

奉行とのあいだに、このようなやりとりを交したのが十八日暮れがた……。

そして十九日の早暁にはもう、渡辺は同心六名とその手下てかの小者十名ほどを引きつれて、永代橋に向向むかっていた。

昨日の残照はみごとだったが、今朝もさす指が染まるかと思うほど、東の空が赤い。
「すごい朝焼けだなあ」

宮地新六郎という若い同心が、橋上からあたりへ眸ひとみを放って言った。

「風が強いせいかな、水面があんなに波立っています。晴れは晴れたものの、なんとなく荒れ気味な空模様ですね、渡辺さん」

「二百十日に近い。朝焼けは崩れやすいともいうよ。せめて今日いっぱい、上天気であつてほしいな」

西は暗く、まだ星が残って、夜の気配が濃い。ふだんなら寝静まっている時刻なのに、今日ばかりは馳走作りや仮装の仕度に起き出したか、町屋の灯ひがチラチラ望まれ、深川側の岸通りに、ことにもそれは多かった。

渡辺は橋番小屋に入つてゆき、警固のあいだじゅう、小屋を足溜まりに使うむね番人どもに告げた。

「奉行所との連絡や小用、弁当などには、橋の西詰めの、御船手番所おふなてを使用させてもらうことに手はずがきめてある。一同、そのつもりでいてくれ」

とも、渡辺は宮地新六郎はじめ、部下の同心たちに言いわたした。

永代橋は、長さおよそ百二十余間けん——。深川の佐賀町から日本橋箱崎町に向けて架け渡した江戸一番の長橋である。まん中に立って、渡辺は橋の両たもとを見、

「宮地、奥山、湯浅の三名は西側、あとの三名は東を受け持ってくれ。小者は四人ずつその下につく。残り二人は船手番所と橋番小屋の双方に待機して、伝令の役に応じる。」

わかったな」

てきばき、それぞれの配備を決めた。

はやくも橋上には、通行人の姿が見えはじめている。宮地らが西の番小屋に入って半刻もすると、空はすっかり明け放たれ、朝焼けの荒々しい燃えも消えて、祭りにふさわしい秋晴れとなった。

橋板に鳴る軽やかな駒下駄、日和下駄の音が、もはや引きも切らない。化け松の兼吉と呼ばれている小者は、宮地が半季に一分ずつ小遣い銭をやって、手先に使っている岡ッ引きだが、目はしのきくことでは人後に落ちなかった。

対岸から、祭り囃子の陽気な笛太鼓が川風に乘って流れて来だすと、いつのまにかいなくなり、やがて料亭の下働きと見えるいなせな若者に、岡持ちをさげさせてもどってきた。

「宮地の旦那、奥山さん湯浅さんも朝がべらぼうに早かったんだ。そろそろ腹が北山、胃の腑もヒリつきはじめたころだと思ってね」

取り出したのは、一升徳利に人数分の猪口、錦手の大皿に小ぎれいに盛られた寿司と口取りである。

「どうしたんだ兼、お前のおごりか？」

「と、いきてえが、そうじゃありません。門前仲町の権十って顔役にちょいと当りを

つけて、料理屋三、四軒から持ち寄りで出させたんでさあ。当りめえでしょう。手めえ町の祭礼に、奉行所の旦那がたがわざわざお出張りなすってるんだ。黙ってたって仕出しの差し入れぐれえ、するのが礼儀ってもんですぜ」

「だめだだめだ。寿司はともかく、酒ってやつは顔に出る。息も匂うからな。渡辺与力に勘づかれてみろ、どやしつけられなあ」

「大丈夫ですってばさ。吹きっさらされて、芯まで冷えこんじまっているんだ。キュッとやったからって一杯や二杯、どうってこたゝありませんよ」

渡辺さんもいいが、職務忠実でくそまじめ、融通のきかない固物なのは閉口だと、さっそく寿司の皿へ手を出しながら奥山がこぼした。

「そりゃあお前とは少々ちがうさ」

からかい口調で湯浅が応じた。

「渡辺さんばかりじゃない。首すじに剃刀の痕のある色男なんぞ、奉行所中さがしたってそうざらにいやしないぜ」

優型の奥山は、まだ元服したての十九なのに、吉原の小格子の女と熱くなり、無理心中をしかけられて揉み消しやら尻ぬぐいやら、親兄弟にさんざん迷惑をかけたことがある。そのくせ、さして懲りてもいない証拠には、剃刀きずを揶揄の材料に持ち出されるたびに赤面するどころか、むしろ得意そうなニヤニヤ笑いを浮かべるのであつた。

町奉行所の役人は奉行のほか、現職以上の出世は望めない。幕吏ではあっても与力にしろ同心にしろ、生涯それ限りで終って、転役・転勤はしないし、親から子への役儀の相続もなかった。もし同心の倅むねが親と同じ職につきたければ、新規採用を願って出る。一代かぎりが決まりなのである。

俸禄も、さほどよくはない。与力で百五、六十石から二百石とまり……。支配役に進んでようやく三十石程度の加俸となる。

同心に至ってはこれはもう、蔵米取りだから、三十俵何人扶持よちといった薄給だし、勤務年限や捕物などの功で増給されても、せいぜい百俵がとまりだった。

そのかわり町方の役人は、市民のくらしに密着している。定廻りじようまわともなるとなおさらである。賄賂でも袖の下でもなく、大名旗本・豪商などは廻り方の家へ付け届けした。「お役目いつも、ごくろうさまです」

礼どころ……。公然の秘密である。

そんな余得があるからこそ、宮地ごとき一介の同心が、たとえわずかな支出ではあっても自腹を切って、岡ッ引きの兼吉あたりを手先に使えるのだし、市井の哀歓にとけこんで「八丁堀の旦那」と立てられる日常も、それなりに張りがあった。

いっばんに彼らはさばけていた。世話に碎けすぎて奥山のように、艶種つやだねを蒔まくのはやや例外にせよ、下情に通じなければ勤まらないう職掌でもある。相手によっては巻き舌ぐ